



兵庫県立津名高等学校 同窓会阪神支部報

第21号

発行所
神戸市灘区鶴甲2-11-4-402
小久保澄夫内
津名高校同窓会阪神支部
TEL & FAX
(078) 842-0425
印刷所：㈱神戸新聞総合印刷
TEL (078) 362-7180

支部長辞任のあいさつ



阪神支部長
小久保 澄夫
(高13回生)

津名高校同窓会
阪神支部の皆様こ
んには。
夏もこれからが
本番です。お元氣
でお過ごしのこと
とお慶び申し上げ
ます。

日頃は支部活動
に何かと御協力・
御支援を賜り心よ
うお礼申し上げます。

さて、私 平成
20年の総会で支部
長代行、2年後の
平成22年より支部
長の任に就いて8
年を経過した今
年、その役職を辞
する事になりました。
すでに6月12
日に開催された定
例役員会で承認を
受け、8月の支部
総会の議決を待つ
のみになりました。
在任中、支部報の
発行だけは途絶え
る事無く行われて
いることは大変う
れしい限りです。

賛助広告等への
御協力をいただき
ている会員の皆
様、各種法人、団
体の皆様には心よ
う御礼申し上げます。
加えて毎支
部会費を納入く
ださる皆様方のお
かげで支部運営が
成り立っています。
感謝の気持ちで一
杯です。今後共、
何とぞよろしくお
願い申し上げます。
支部報編集委員
の皆様には毎年5
か月に及ぶ会議の
連続に、いわゆる
手弁当でお付き合
い願う本当にあり
がたい事でした。
就任時より組織
の若返り、活性化
を念頭においてき
ましたが、思うに
まかせず結果が伴
わず、誠に申し訳
ありませんでした。
次期支部長には
高16回生の東田雅
俊氏にお願いし、

すでに役員会で承
認を得、総会での
議決を待つのみで
す。
2020年の母
校創立100周年
記念行事等、本部
に協力して行う事
案もたくさん出て
きますが、奇しく
も本部の方でも故
薄木前会長の後任
に高16回卒の高島
玲子氏が就任され
る事になり、若い
皆様方の力で頑張
っていただけるも
のと期待しており
ます。

しかしながら、
同窓会は、先輩諸
氏のお力添えがな
ければ成り立ちま
せん。皆で力を合
わせて新執行部を
盛り立てていきま
しょう。
学校は卒業して
も、同窓会は一
生です。皆様 母
津名高校のため、
お力を！
本場に長い間の
ご支援・御協力に
感謝し、最後の
挨拶といたします。

ご挨拶



東田 雅俊
(高16回生)

本年6月の津名
高校同窓会阪神支
部役員会において
次期支部長に推薦
いただいた16回生
の東田雅俊です。
さて、最近私が
感動したことが一
つあります。20
15年3月に開催
された「淡路島も
りあげスピーチコ
ンテスト」での津
名校生のスピーチ

です。現役津名校
生30名にアンケート
したところ9割
もの生徒が「淡路
島に生まれ育って
良かった。」と答え
たというのです。
そしてこのスピ
ーチは多くの審査
員や来場者に大き
な感動を与え、見
事最優秀賞(知事
賞)に輝きました。
最近、何かとテ
レビ等で淡路島が
紹介されることも
多い反面、止まら
ない人口の減少、
過疎化の一層の進
展等も現実です。
そうしたなか、今
淡路で生活してい
る高校生のお大半が
淡路に生まれ育つ
たことを誇りに思
っているというこ
とはなんと嬉しい
ことでしょうか。
故郷は、離れて
みて、より故郷を
実感し、年々とも
に懐かしさを感じる
ものです。
阪神支部は、年
1回新聞を発行
し、2年に一度総
会を開催するこ
を中心に活動して
おります。故郷淡
路や津名校の現況
等、又、同窓生の
近況や思いを新聞
を通して知ること
も楽しく懐かしい
ものです。そして
総会等での同窓生
同士の交流も何物
にも代えがたい貴
重なものです。皆
様方にはこの阪神
支部での交流の場
をぜひご利用いた
だければと願って
おります。
故郷淡路島を離
れて住む私達にと
って、淡路島はか
げがえの無い存在
です。正に「心の
ふるさと」と言っ
ていいでしょう。
皆様方には、阪
神支部の活動にぜ
ひご参加、御協力
くださいますよう
心からお願い申し
上げます。

里山の棚田で、カボチャコンテスト

そばカフェ生田村(淡路市)

田村 伊久男
(高17回生)

「そばカフェ生
田村」も営業を始
めてから6年目に
入りました。皆様
のご支援によって
地域ごと元氣で、
オープン以来毎年
1万人の方々が
越しになっており
ます。
今年、地域お
こしを始めてから
10年目。この節目
に棚田でカボチャ
コンテストを行う
ことになりました。
生田でジャン
ボカボチャを植
えていただき、10
月15日(土)恒例
の「そば花まつり」
でその大きさを競
うというものです。
育て方次第では
100kg近くにも
なるというカボチ
ャ。ご自分で植え
付けや管理をする
もよし、全部お任
せもよし。ただ
し、カボチャ1本

阪神支部報 ご案内

全国の津名高等
学校同窓会の皆様
お元氣ですか。
今年、2年毎
に開催される津名
高校同窓会の阪神
支部および本部の
総会が故郷・淡路
島の志筑「ワール
ドパークおのころ」
において8月27日
(土)に開催されま
す。また、同日に
校庭中庭にて開催
される現役の津名
校生の「たそがれ
コンサート」を鑑

賞いたします。
阪神支部では、
一昨年と同様 神
戸から貸し切りバ
スをご用意しま
す。支部会員の皆
様のお友達をお誘
いいただきご参加
を、お待ちしております。
(関連記
事10面)
同窓会では、支
部会員及び全国の
同窓会員のより一
層の親交を深めた
と思います。
阪神支部報はこ
れまで一部地域を
除き発送しており
ましたが、今回は、
東京支部報との合
同版になり、東京
支部会員の皆様か
ら多数の原稿を頂
きました。紙面の
関係により一部不
掲載になりました。
また津名高校同
窓会本部報と同日
発行になりました
ので本部の支援に
より同窓会会員の
皆様全員に同時に
お送りいたします。
今回の紙面は従
来と異なり、阪神
支部報の紙面は
1・2・9・10面
に、東京支部報は
7・8面に、3か
ら6面は、不動産
の論文「淡路島の
歴史と廃藩置県」
を特集記事として
掲載しており、保
存版として利用出
来るようにしてお
ります。



株式会社 ツーワン(志筑) 淡路市志筑3111-05
tel: 0799-60-0030
代表取締役 横山 智一
HP: www.airu21.com

国指定 天然記念物 野島断層
北淡震災記念公園
開館時間 9:00~17:00
淡路市小倉177
TEL 0799-82-3020
HP http://www.nojima-danso.co.jp



野島断層保存館
震災体験館
メモリアルハウス
物産館
ショップほくだん
レストランさくら
セミナーハウス
阪神・淡路大震災を語り伝え
教訓を未来へ！

宝と花琳

株式会社 董寿堂
代表取締役 福永 勉
(高18回生)

※工場見学・お香づくり体験もありません。
千原園 淡路市多賀二五五一
TEL 0799-185-1301(代)
FAX 0799-185-2622
URL http://www.kunido.co.jp
E-mail awaji@kunido.co.jp

燃えよエンジンの青春

津名高校野球部保護者会

片平 吉昭
(高37回生)

朝一番、「出発し
よかー」の言葉か
ら一日が始まり、
保護者としての一
年があつという間
に過ぎていきまし
た。

昨年の春、69期
生として息子が県
立津名高等学校
(以下「本校」と
いう。)へ入学し、
同時に野球部へ入
部させて頂くこと
となりました。小
学4年生から地元
の少年野球チーム
で軟式野球をはじ
め、中学校でも軟
式野球部に所属
し、本校野球部で
プレーすることを
目標に野球に打ち
込んでくれました。
近年、中学への
入学と同時に、
硬式野球のクラブ
チームに所属し、
高校では淡路島を
離れ、県内外の強
豪校へ進学する選
手が急激に増えて
いますが、地元愛
をもち、本校野球
部でプレーできる
ことは息子にとつ
ても非常に大きな
意味があると思っ
ています。

私も本校の37期
生であり、決して
上手くはなかった

ですが野球部で3
年間お世話になつ
た経験から、息子
が本校で甲子園を
目指してくれるこ
とが非常に大きな
喜びであり、この
3年間での経験が
自信となり、人と
して大きく成長し
てくれることを願
っています。ちな
みに、神田監督が
初めて本校に赴任
したのが31年前で
あり、その時の教
え子が私達37期生
であつたことにも
何かの縁を感じて
います。

この春に卒業し
た67期生は、神田
監督指揮のもと、
甲子園へあと一歩
というところまで
活躍し、本校野球
部復活の狼煙を上
げてくれました。
その先輩の背中を
追うように、日々
の練習も早朝、昼
休み、放課後の時
間を一生懸命取り
組んでおり、放課
後の練習が終わっ
た後は自主練習を
行っているようで
す。

淡路島は観光地
として、最
近では全国からの
移住者が増えてき

ていますが、最大
の弱点と言え公
共交通であり、生
徒の通学について
も自転車通学以外
は保護者の送迎が
通例となつていま
す。現部員も、遠
くは南あわじ市か
ら通学しており、
朝晩の送迎、帰宅
後の食事や汚れた
ユニホームの洗濯
も含め、どの家庭
も毎日が時間との
戦いなのでしょう。
我が家も同じよう
な状況ではありま
すが、嬉しいこと
に家族みんなが本
校野球部のファン
であり、息子の頑
張っている姿に、
逆にエネルギーを
もらっているのか
なつて感じること
が多々あります。
2年目の春は、
冬場の練習により
選手一人ひとりが
パワーアップでき
たのですが、残念
ながら春の県大会
に出場することが
できず、3年生に
とっては最後とな
る夏の大会に向け
て下級生と共に泥
まみれになって練
習に励んでいます。
例年、阪神支部
の皆様には球場ま

で足を運んで頂
き、後輩に向け大
きな声援を送って
もらっていること
に対し、関係者を
代表し心より感謝
を申し上げます。
これからも母校の
頑張りを皆様に届
けられるよう、選
手、関係者一同精
進してまいります
ので、ご指導ご鞭
撻の程よろしくお
願い申し上げます。



平成28.29年度 兵庫県立津名高等学校同窓会阪神支部役員(案)

	卒回	氏名	卒回	氏名	卒回	氏名
顧問	3	筆谷 正	6	森多 貴美子	18	柳谷 承二
	5	立花 和也	6	石原 富子	18	杉岡 実季子
	13	小久保 澄夫	7	明角 清重	18	吉川 泰久
支部長	16	東田 雅俊	8	後藤 拓代	18	森 章次
副支部長	8	沖 正典	9	平岡 英忠	18	中尾 進
	10	柴生 進	10	道下 賀子	19	花野 正悦
	13	田中 種義	13	北野 佳代子	19	高田 穂
	15	中野 淑郎	13	石上 勝美	19	田井地 力
	15	佐藤 正文	13	石田 きさ代	20	管 数子
	16	岡内 とどむ	13	桜本 房子	20	大西 光代
	17	正面 昇	14	桑名 賀代子	21	木下 弘子
	27	藤木 啓彰	15	門 康彦	21	橋口 芳子
会計	16	上田 敏晴	15	北川 映子	21	辻野 由里子
会計監査	14	南 正光	15	上田 佐代子	21	梶畠 賀敬
	19	南山 明義	15	砂川 文孝	22	柏木 豊彦
監事	4	中須賀 允彦	15	松野 聰子	23	奥田 正博
	5	河合 春子	16	岩中 俊博	23	池田 幸三
	6	坂東 章好	16	鈴鹿 胤美	27	藤森 泰宏
	6	坂東 洋治	16	長尾 秀美	27	鍋谷 高広
	6	保宗 幸夫	17	中田 晴幸	27	奥野 豊
	6	尾崎 田鶴子	17	潮崎 章二	34	向田 憲司
					38	中野 恭典

以上 64名は

平成28年8月27日開催の阪神支部総会にて選出決議の予定

津名高等学校同窓会阪神支部 平成28年6月30日

収支決算見込み

(平成26年7月1日から平成28年5月31日まで)

(単位:円)

収入の部		
科 目	金 額	備 考
前期繰越金	4,289,073	普通預金(三井住友) 2,967,113 ゆうちょ銀行 1,321,960
会費	694,010	通常会費
本部補助金	400,000	
賛助広告費	710,000	同窓会新聞広告費
預金利息	655	三井住友銀行
合 計	6,093,738	

支出の部		
科 目	金 額	備 考
印刷費	1,498,250	同窓会新聞 19号、20号
印刷関連費	50,819	タックラベル、コピー代
総会費	151,190	津名ハイツ他(平成26年8月30日開催)
通信費	36,920	切手、葉書等
会議費	53,726	支部会、編集会議
消耗品費	4,509	用紙代、インク代
支払手数料	1,984	銀行振り込み手数料等
寄付金	20,000	津名高校マンドリンククラブへ(総会時)
供花代	32,400	薄木同窓会長逝去告別式
前渡金	200,000	同窓会新聞21号、神戸新聞総合印刷へ
次期繰越金	4,043,940	普通預金(三井住友) 1,093,652 ゆうちょ銀行 2,950,288
合 計	6,093,738	

平成28年8月27日 支部総会で承認決議の予定

MITSUグループ

ミツ精機株式会社
ミツテック株式会社淡路市下河合301番地
http://www.mitsu.co.jp/河合 春子
(高五回生)尾崎 田鶴子
(高六回生)柴生 進
(高十回生)オキオ務経営事務所
社会保険労務士
沖 正典
(高九回生)〒650-0001 神戸市垂水区上高丸一丁目二二四〇五
TEL/〇七八七〇八二二六六
FAX/〇七八七〇八二二六六〒650-0001 摂津市千里丘四一三二七
TEL/〇六三三八九一四〇七〇

〒650-0001 川西市美園町七十四

淡路島の歴史と廃藩置県

―何故淡路島は兵庫県になったか?―

不動 雅一
(高13回生)

1. 淡路島の歴史(概観)

太古・始まりの時
1970年代からの発掘調査で、中国大陸には揚子江流域で黄河文明(紀元前6000年・同15000年)よりも古い文明が繁栄していたことが明らかとなってきた。これらを総称して「長江文明」という。この長江文明が栄えたのは紀元前15000年とされており、これは近年明らかになってきた日本の「縄文時代」と年代をほぼ同じくする。

縄文時代末期・弥生時代

司馬遷の「史記」によれば、こうした長江文明を築いた民族は漢民族ではなく「三苗さんみゃお」と呼ばれる民族であるが、これが、紀元前2000年頃、黄河文明を築き繁栄を謳歌していた漢民族(夏王朝)が南下してきたことよって、次第にその地を追われ、雲南・貴州、チベット、ベトナム、台湾、日本等へ離散したとされる。

この内、紀元前1000年頃から日本列島に向かい九州、四国、瀬戸内等に定住しはじめたのがアマ族(海人族)と呼ばれる種族で、この海人族が日本に稲作や各種農耕技術、最新の土器製造技術、青銅器・鉄器製造技術等を持ち込みだすことで弥生時代が始まった

とみられている。

こうした経緯で日本に渡来した海人族のうち、淡路島には、野島海人族と三原海人族の2部族が定住した。これが淡路島の始まりである。因みに、現在の南あわじ市(旧三原郡)には、鳴門の渦潮から「吹上浜」という海岸がある。その近くに「阿万(アマン)」と呼ばれる集落があり、これが三原海人族が最初に渡来し定住した場所ではないか?とみられている。

この海人族は、定住した日本各地で、朝鮮民である縄文人や、半島などから渡来してきた大陸系渡来人と長い歳月を掛けて融和、混血を繰り返す中で、現在の日本人の原型を形成する核の一つとなっていた。

そうした中で、淡路島は、瀬戸内ルート、太平洋沿岸ルートの中継点とも言うべき地勢学的位置を占めていたため、遅れて渡来してきた海人族が東進・北上する上で、彼らに対する補給基地・情報センターとしての役割を果たし、後に、大和政権の成立・発展に大きく貢献した。

こうした経緯から、淡路島の海人族は大和政権が確立すると天皇家への臣従を誓い、朝廷は淡路島を「聖地」と見做すようになる。大和政権の支配体制が整備された律令時代、野島海人族の定住していた地域が「津名郡」、三原海人族の定住していた地域が「三原郡」と呼ばれ、淡路島はこの2郡で構成されていた。のちに洲本と呼ばれる集落が発展するが、これは長らく津名郡の一部であった。↓参考資料「淡路島(一面歴史地図) 参照」

大和政権の成立以降、淡路島は長らく「聖地」として朝廷の直轄地とされ、それを象徴するものとして、津名郡には皇祖神を祭る「伊弉諾神宮(淡路一宮)・三原郡には、屯倉と国衙、及び、大和国現神社(淡路二宮)が置かれていた。しかし、垂仁天皇の御代に天照大神の神託により伊勢に神宮が創建されること、天皇家の「聖地」は伊勢となし「皇祖神」も天照大神となった。

初期には全島が朝廷の直轄地であったが、藤原氏の権勢が高まると共に、津名郡では、生穂荘、志筑荘、塩田荘、由良荘など、三原郡では鳥飼荘などが藤原氏や有力寺社の荘園となっていた。現在の志筑に「源義経と静御前の墓」があるのは室町時代に藤原氏の一族である公卿・一条兼良がその荘園内に建立したものである。尚、こうした荘園の管理を任された者は荘官と呼ばれた。

鎌倉時代・室町時代
鎌倉幕府が全国に守護・地頭を置き、全国支配の体制を築くと、各地で、これらの役職に就いた御家人・豪族が土地の所有と支配を進め、朝廷の直轄地や貴族の荘園は彼らに奪われていった。また荘官の中にも荘園を私視する者も出てきて、各地の守護・地頭・荘官が次第に武力を有した国人(こくにん・国衆(くにしゅう))としてその勢力を強めて行った。

淡路島では、鎌倉時代、幕府創設と共に頼朝の腹心であった近江源氏出身の佐々木経高(つねたか)が1192年、淡路・阿波・土佐の三国守護に任ぜられ、淡路の守護所とした。しかし、頼朝逝去の翌年、京の治安維持のため独断で淡路・阿波・土佐の兵を動員、これが後鳥羽上皇の怒りを買い解任される(承久の変(1221年))。では、「やはり將軍よりも天皇」の判断から後鳥羽上皇に立つが敗死する。代わって摂津・淡路両国の守護職に任ぜられたのが御家人・長沼宗政。この長沼氏も養育館を守護所として、鎌倉時代を通じて代々淡路守護職を務めたが、1333年の「建武の新政」により罷免される。一方、1200年代初め、菅和泉守道忠が大日川原に志知氏、阿万氏、梶原氏などの間で南朝派・北朝派の抗争があった。しかし、中には、安宅氏のように、その時々々の情勢を見ながら有利な方につき、北朝方・南朝方・北朝方と立ち回る者もいた。

戦国時代
由良古城を拠点としていた安宅(あたぎ)氏(安宅治興(はるおき)とその一族)が洲本城、炬口城、湊城、白果城などを築城し勢力を拡大、これらの拠点を通じて菅氏と並ぶ淡路水軍の棟梁となっていた。この頃、細川氏一族に内紛が勃発、その勢力が衰え始める。一方、応仁の乱(1467)・1477年)のあと、細川氏の筆頭家臣であった三好氏が急速にその勢力を伸ばし、その一族が畿内各地を支配した。特に、長慶の時代には、足利将軍家や細川氏を凌ぐ勢いとなり、遂には、阿波・淡路両国の細川家を滅ぼし(下剋上)、その支配地を全て手中に収めている。淡路では、1517年、三好氏之長が阿波・讃岐の軍勢を率いて養育館を急襲、守護・細川尚春は和泉国に逃亡した。そうした情勢の変化に一早く対応した三好氏に臣従したのが、郡家城主・田村春良。三好氏の跡を継ぎ三好家当主となっていた長慶は、この春良を阿波・三好家の家老とし、その領地(津名郡2万石)を安堵することで田村氏をその支配下におく。同じ頃、安宅氏の本家である紀州・安宅氏から相続問題を巡る内紛がから衰退。このため、淡路・安宅氏は三好氏との友好関係を通じて一族の安泰を図る。これを受けて、長慶は、弟・冬康を安宅治興の養子とし、縁戚関係を通じて、安宅氏をもその支配下に置く。こうした動きを受けて、志知城を拠点としていた野口氏も、三好元長の5男・冬長を当主に迎えて、三好氏との縁戚関係を確立、その勢力の維持を図る。従ってこの時期、淡路島は、三好氏が、田村氏、安宅氏、野口氏を通じて間接支配する体制が確立し、この体制がその後70年余り続く。1568年、織田信長が入洛し「天下布武」を鮮明にするが、その実現に大きな障害となつたのが、頼朝の率いる石山本願寺と一向宗。この本願寺を支援すると同時に信長の中国進出を阻止したいと考えていた毛利氏は瀬戸内海・大阪湾の制海権を確保し、本願寺への支援物資の輸送路を確保すると共に、西国防衛の拠点とすべく1573年、岩屋城を攻撃、安宅水軍総帥であつた安宅信康はこれに對抗するため信長に援軍を求めるが、織田軍は毛利軍に惨敗。早くから毛利軍に組みついてた菅達長が岩屋城主となる。一方、敗れた安宅信康は毛利氏の傘下に組み込まれ、毛利の武將として安芸に移り住む。しかし、達長は、その後、織田方に鞍替えし、1578年の第2次水津川口海戦では織田方の水軍として九鬼水軍と共に毛利軍と戦い、織田軍がこれに圧勝する。この功により達長は信長から岩屋城(1万5000石)を安堵される。ただ、安宅氏は岩屋城を奪われたものの、また洲本城、由良城、白果城などは健在であつたので、淡路島から完全に駆逐された訳ではなかった。

豊臣時代
1581年「鳥取攻め」の帰途、姫路に一時滞在した秀吉は、四国制圧を目論み、阿波・讃岐の三好氏を攻める。土佐の長宗我部元親や長宗我部氏と盟友関係にあつた菅達長を制圧せよと信長の命を受け「淡路攻め」を敢行する。この「淡路攻め」に派遣されたのが、軍師・黒田官兵衛、池田元成、仙石秀久、加藤嘉明らの武將。この時、三好氏一族であつた野口冬長は秀吉に降り、志知城を黒田官兵衛に明け渡した。自らも淡路を去る。官兵衛はここを淡路攻めの拠点として指揮を取ることが、この淡路攻めで、岩屋城、仁井城、猪熊城、郡家城、洲本城、白果城、柳沢城、田村氏、川上氏、柳沢氏、梶原氏など、淡路島の国人(豪族)はすべて滅亡する。しかし、菅達長だけは敗死を免れ、土佐の長宗我部元親を頼り潜伏する。そこに「本能寺の変」(1582年6月)が勃発する。「備中高松城攻め」の最中であつた秀吉は急ぎ、毛利と和睦を結び「中国大返し」を敢行するが、明石に滞在中に、光秀や長宗我部元親と内通する菅達長が仙石秀久(当時は代官)不在の隙を突き洲本城を占拠したとの報が入る。そこで、秀吉は再度、淡路島に兵を向け岩屋城、郡家城、志知城を接収し、洲本城を奪還する。敗走した達長は再び長宗我部氏を頼って淡路を脱出する。これ以降、淡路島は全局が豊臣家直轄の知行地(「太閤蔵入地」となる。そして、1583年、この「太閤蔵入地」から、淡路攻めに功績大であつた加藤嘉明に志知1万5000石、仙石秀久には洲本を含む淡路5万石が与えられる。しかし、仙石氏は僅か2年後の1585年には信濃へ転封されたため、洲本3万石は脇坂淡路守安治(のち、伊予・大洲藩主)に播州・竜野藩主に与えられ、1586年には志知・加藤嘉明に岩屋1万5000石が加増される。ここで注意すべきは、加藤嘉

明が衰え始める。一方、応仁の乱(1467)・1477年)のあと、細川氏の筆頭家臣であった三好氏が急速にその勢力を伸ばし、その一族が畿内各地を支配した。特に、長慶の時代には、足利将軍家や細川氏を凌ぐ勢いとなり、遂には、阿波・淡路両国の細川家を滅ぼし(下剋上)、その支配地を全て手中に収めている。淡路では、1517年、三好氏之長が阿波・讃岐の軍勢を率いて養育館を急襲、守護・細川尚春は和泉国に逃亡した。そうした情勢の変化に一早く対応した三好氏に臣従したのが、郡家城主・田村春良。三好氏の跡を継ぎ三好家当主となっていた長慶は、この春良を阿波・三好家の家老とし、その領地(津名郡2万石)を安堵することで田村氏をその支配下におく。同じ頃、安宅氏の本家である紀州・安宅氏から相続問題を巡る内紛がから衰退。このため、淡路・安宅氏は三好氏との友好関係を通じて一族の安泰を図る。これを受けて、長慶は、弟・冬康を安宅治興の養子とし、縁戚関係を通じて、安宅氏をもその支配下に置く。こうした動きを受けて、志知城を拠点としていた野口氏も、三好元長の5男・冬長を当主に迎えて、三好氏との縁戚関係を確立、その勢力の維持を図る。従ってこの時期、淡路島は、三好氏が、田村氏、安宅氏、野口氏を通じて間接支配する体制が確立し、この体制がその後70年余り続く。1568年、織田信長が入洛し「天下布武」を鮮明にするが、その実現に大きな障害となつたのが、頼朝の率いる石山本願寺と一向宗。この本願寺を支援すると同時に信長の中国進出を阻止したいと考えていた毛利氏は瀬戸内海・大阪湾の制海権を確保し、本願寺への支援物資の輸送路を確保すると共に、西国防衛の拠点とすべく1573年、岩屋城を攻撃、安宅水軍総帥であつた安宅信康はこれに對抗するため信長に援軍を求めるが、織田軍は毛利軍に惨敗。早くから毛利軍に組みついてた菅達長が岩屋城主となる。一方、敗れた安宅信康は毛利氏の傘下に組み込まれ、毛利の武將として安芸に移り住む。しかし、達長は、その後、織田方に鞍替えし、1578年の第2次水津川口海戦では織田方の水軍として九鬼水軍と共に毛利軍と戦い、織田軍がこれに圧勝する。この功により達長は信長から岩屋城(1万5000石)を安堵される。ただ、安宅氏は岩屋城を奪われたものの、また洲本城、由良城、白果城などは健在であつたので、淡路島から完全に駆逐された訳ではなかった。

あつた野口冬長は秀吉に降り、志知城を黒田官兵衛に明け渡した。自らも淡路を去る。官兵衛はここを淡路攻めの拠点として指揮を取ることが、この淡路攻めで、岩屋城、仁井城、猪熊城、郡家城、洲本城、白果城、柳沢城、田村氏、川上氏、柳沢氏、梶原氏など、淡路島の国人(豪族)はすべて滅亡する。しかし、菅達長だけは敗死を免れ、土佐の長宗我部元親を頼り潜伏する。そこに「本能寺の変」(1582年6月)が勃発する。「備中高松城攻め」の最中であつた秀吉は急ぎ、毛利と和睦を結び「中国大返し」を敢行するが、明石に滞在中に、光秀や長宗我部元親と内通する菅達長が仙石秀久(当時は代官)不在の隙を突き洲本城を占拠したとの報が入る。そこで、秀吉は再度、淡路島に兵を向け岩屋城、郡家城、志知城を接収し、洲本城を奪還する。敗走した達長は再び長宗我部氏を頼って淡路を脱出する。これ以降、淡路島は全局が豊臣家直轄の知行地(「太閤蔵入地」となる。そして、1583年、この「太閤蔵入地」から、淡路攻めに功績大であつた加藤嘉明に志知1万5000石、仙石秀久には洲本を含む淡路5万石が与えられる。しかし、仙石氏は僅か2年後の1585年には信濃へ転封されたため、洲本3万石は脇坂淡路守安治(のち、伊予・大洲藩主)に播州・竜野藩主に与えられ、1586年には志知・加藤嘉明に岩屋1万5000石が加増される。ここで注意すべきは、加藤嘉

明が衰え始める。一方、応仁の乱(1467)・1477年)のあと、細川氏の筆頭家臣であった三好氏が急速にその勢力を伸ばし、その一族が畿内各地を支配した。特に、長慶の時代には、足利将軍家や細川氏を凌ぐ勢いとなり、遂には、阿波・淡路両国の細川家を滅ぼし(下剋上)、その支配地を全て手中に収めている。淡路では、1517年、三好氏之長が阿波・讃岐の軍勢を率いて養育館を急襲、守護・細川尚春は和泉国に逃亡した。そうした情勢の変化に一早く対応した三好氏に臣従したのが、郡家城主・田村春良。三好氏の跡を継ぎ三好家当主となっていた長慶は、この春良を阿波・三好家の家老とし、その領地(津名郡2万石)を安堵することで田村氏をその支配下におく。同じ頃、安宅氏の本家である紀州・安宅氏から相続問題を巡る内紛がから衰退。このため、淡路・安宅氏は三好氏との友好関係を通じて一族の安泰を図る。これを受けて、長慶は、弟・冬康を安宅治興の養子とし、縁戚関係を通じて、安宅氏をもその支配下に置く。こうした動きを受けて、志知城を拠点としていた野口氏も、三好元長の5男・冬長を当主に迎えて、三好氏との縁戚関係を確立、その勢力の維持を図る。従ってこの時期、淡路島は、三好氏が、田村氏、安宅氏、野口氏を通じて間接支配する体制が確立し、この体制がその後70年余り続く。1568年、織田信長が入洛し「天下布武」を鮮明にするが、その実現に大きな障害となつたのが、頼朝の率いる石山本願寺と一向宗。この本願寺を支援すると同時に信長の中国進出を阻止したいと考えていた毛利氏は瀬戸内海・大阪湾の制海権を確保し、本願寺への支援物資の輸送路を確保すると共に、西国防衛の拠点とすべく1573年、岩屋城を攻撃、安宅水軍総帥であつた安宅信康はこれに對抗するため信長に援軍を求めるが、織田軍は毛利軍に惨敗。早くから毛利軍に組みついてた菅達長が岩屋城主となる。一方、敗れた安宅信康は毛利氏の傘下に組み込まれ、毛利の武將として安芸に移り住む。しかし、達長は、その後、織田方に鞍替えし、1578年の第2次水津川口海戦では織田方の水軍として九鬼水軍と共に毛利軍と戦い、織田軍がこれに圧勝する。この功により達長は信長から岩屋城(1万5000石)を安堵される。ただ、安宅氏は岩屋城を奪われたものの、また洲本城、由良城、白果城などは健在であつたので、淡路島から完全に駆逐された訳ではなかった。

あつた野口冬長は秀吉に降り、志知城を黒田官兵衛に明け渡した。自らも淡路を去る。官兵衛はここを淡路攻めの拠点として指揮を取ることが、この淡路攻めで、岩屋城、仁井城、猪熊城、郡家城、洲本城、白果城、柳沢城、田村氏、川上氏、柳沢氏、梶原氏など、淡路島の国人(豪族)はすべて滅亡する。しかし、菅達長だけは敗死を免れ、土佐の長宗我部元親を頼り潜伏する。そこに「本能寺の変」(1582年6月)が勃発する。「備中高松城攻め」の最中であつた秀吉は急ぎ、毛利と和睦を結び「中国大返し」を敢行するが、明石に滞在中に、光秀や長宗我部元親と内通する菅達長が仙石秀久(当時は代官)不在の隙を突き洲本城を占拠したとの報が入る。そこで、秀吉は再度、淡路島に兵を向け岩屋城、郡家城、志知城を接収し、洲本城を奪還する。敗走した達長は再び長宗我部氏を頼って淡路を脱出する。これ以降、淡路島は全局が豊臣家直轄の知行地(「太閤蔵入地」となる。そして、1583年、この「太閤蔵入地」から、淡路攻めに功績大であつた加藤嘉明に志知1万5000石、仙石秀久には洲本を含む淡路5万石が与えられる。しかし、仙石氏は僅か2年後の1585年には信濃へ転封されたため、洲本3万石は脇坂淡路守安治(のち、伊予・大洲藩主)に播州・竜野藩主に与えられ、1586年には志知・加藤嘉明に岩屋1万5000石が加増される。ここで注意すべきは、加藤嘉

自然がいっぱい、ほっとする空間
そばカフェ生田村
いくたむら
北淡インター山開四キロ(案内板あり)
TEL 〇七九九・一七〇一・四七八
URL: <http://kutanura.web.fc2.com>
営業日 土日 祝
千原町 東京都品川区南大井一十七・一七・四六
TEL 〇三・三七六七・二〇六
笠山恭昭
(高13回生)
小久保澄夫
(高13回生)
田中種義
(高13回生)
医療法人社団高山会 高山クリニック
理事長 中山義晴
卒業生十三名在職
千原町 淡路市志筑新島六一三七
TEL 〇七九九・一六二一・一三六六

明、脇坂安治は、それ ぞれが独自の知行地を 与えられた大名となつた が、淡路島に残る「太 閤蔵入地」の代官をも 兼務させられていた。 つまり、淡路島には、 まだこれら大名の知行 地以外に秀吉の直轄領 があったということだ である。しかも、159 5年、加藤嘉明が伊予 に加増・転封になつた あとは三原郡全域が 「太閤蔵入地」となっ ている。 この時期、阿波の三 好氏は長宗我部氏に攻 められ阿波を追われた のみならず、讃岐も侵 略されたため、三好氏 の配下であった淡路の 国人・賀集盛政は孤立 無援となる。そこで、 この窮地を脱する窮余 の策として、彼は、同 じ長宗我部氏を敵とし て秀吉を頼る。秀吉は これを受け入れ、賀集 氏を脇坂安治の家臣に 加えている。 一方、1580年に 竜野5万3000石の 城主となつていた蜂須 賀小六は1585年 「四国攻め」の功によ り阿波17万5000石 を賜り竜野から阿波に 転封され、竜野は福島 正則に与えられてい る。 秀吉から阿波一国を 拝領した時、小六（当 時60才）は、秀吉に願 い出て、自らは阿波に 赴かず、秀吉の側近と して大坂城に留まる一 方、阿波には、嫡男・ 家政（当時、28才）を 城主として赴かせてい る。つまり、家政に家 督相続させた訳であ る。その際、秀吉の命 で、家政の補佐役とし て、筆頭家老に小六の 義兄弟で須賀家の客分 であった稲田植元（た ねもと）（当時41歳、 脇城代として1万石 を賜る）が任命されて		いる。因みに、家政は 1585年に阿波入り した直後は一宮城に入 城するも、すぐに徳島 城を築城しこを居城 としている。この蜂 須賀家と稲田家の関係 については別項で詳述 する。 一方、1609年、 脇坂氏が伊予・大洲に 転封となつたあと、淡 路3万石は一時的に藤 堂高虎に与えられる が、高虎は津城を本拠 としていたため、洲本 城には居城せず、数 年後、洲本を含む津名郡 6万石が姫路城主・池 田輝政（52万石）に与 えられている。この時、 輝政は、岩屋城（絵島 が丘城）を築城すると 共に由良城の修復を行 つて、一次の天下人は 家康」と判断した家政 は、嫡男至鎮（よしし げ）と稲田植元に対し 「上杉政」に当たつて いた家康陣営に参陣 するように指示する 一方、自らは、秀吉か ら拝領した所領をすべ て豊臣家に返上した。 その際、徳島城などの 城明け渡しの見分役と して阿波国に赴いたの が、皮肉にも、あの小 早川秀明（秀吉の甥で 筑前・名島30万700 0石の藩主。関ヶ原の 合戦で東軍に寝返つ た）であった。 家政の読み通り、1 600年9月、遂に東 西両軍は関ヶ原で合戦 の火ぶたを切るが、家 政の指示通り、至鎮と 植元は東軍の武将とし て参戦、大いに戦功を あげた。この時、家政 は「西軍」から参陣を 求められるが「病氣」 と称して出陣しなかつ た。 1601年、家政は、 「関ヶ原の合戦」にお ける至鎮らの目撃まじ い戦功により、家康か ら再び阿波一国の知行 を安堵されるが、その		際、家政は至鎮に家督 を相続させている。こ の家督相続により蜂須 賀家当主で、かつ、江 戸時代の初代蜂須賀藩 主となった至鎮は後年 「蜂須賀藩の藩祖」と 呼ばれている。 一方、1609年、 脇坂氏が伊予・大洲に 転封となつたあと、淡 路3万石は一時的に藤 堂高虎に与えられる が、高虎は津城を本拠 としていたため、洲本 城には居城せず、数 年後、洲本を含む津名郡 6万石が姫路城主・池 田輝政（52万石）に与 えられている。この時、 輝政は、岩屋城（絵島 が丘城）を築城すると 共に由良城の修復を行 つて、一次の天下人は 家康」と判断した家政 は、嫡男至鎮（よしし げ）と稲田植元に対し 「上杉政」に当たつて いた家康陣営に参陣 するように指示する 一方、自らは、秀吉か ら拝領した所領をすべ て豊臣家に返上した。 その際、徳島城などの 城明け渡しの見分役と して阿波国に赴いたの が、皮肉にも、あの小 早川秀明（秀吉の甥で 筑前・名島30万700 0石の藩主。関ヶ原の 合戦で東軍に寝返つ た）であった。 同年6月、この藩主 不在となつていた淡路 国が、大坂冬の陣にお ける功績により蜂須賀 至鎮に与えられた。そ の結果、淡路島は蜂須 賀家の知行地（石高は 8万石）となるが、家 康の命により、筆頭家 老であった稲田植元 内、「蜂須賀家を含む津 名の43か村・浦」（1 万4000石）が稲田 家の知行地として分与 された。 この時、植元は最初、 由良城に入城するが、 のちに「由良は狭く領		地の管理にも不便」と して、洲本城への住み 替えを幕府（3代将軍 家光）に願ひ出、認め られている（由良引 け）。こうして稲田家 は蜂須賀家の客分であ りながら同時に大名と しての処遇を受け、 洲本城・城代となる。 そして、この体制が幕 末・明治初めまで続 き、版籍奉還し廃藩置 県を迎える。 廃藩置県と近代的中 央集権国家への道 大政奉還から版籍奉 還 1867年（慶応3 年）11月、徳川慶喜が 政権を天皇に返上、幕 府直轄地と旗本の知行 地を朝廷に返還し、統 一して、1869年（明 治2年）6月、全国2 74大名がその知行地 と領地の支配権を朝廷 に返還（版籍奉還）し た。これを受けて、明 治新政府は本格的に 「天皇を中心とした近 代的中央集権国家」確 立に向けた行政機構の 近代化を推し進めた。 これが廃藩置県であ る。 歴史の教科書では、 廃藩置県は1871年 （明治4年）7月に実 施されたとされるが、 実際には、大政奉還の 直後から1890年 （明治25年）5月の「府 県制・郡制」によつて 「3府43県」体制が固 まるまで約20年余の年 月をかけて実施され、 「1道1郡2府42県」 が確定するのは、19 47年（昭和22年）で ある。これに返還後の 沖縄が加わって「1道 1郡2府43県」とな ったのは1972年（昭 和47年）5月である。 大政奉還であつて、明 治新政府は、旧幕府・ 旗本の直轄地の内、政 府の政治・軍事・経済		で重要な3都（江戸、 大阪、京都）、開港5 港（箱館、新潟、神奈 川横濱、兵庫、神戸）、 長崎」と、天皇家にと つて重要な場所である 度会（わたらい）（伊 勢神宮を含む）と奈良 （平城京を含む）を含 み、10の地域を「府」 とし、その他の地域を 「県」として、政府か ら「知府事」「知県事」 を派遣した。 その後、慶喜の大政 奉還に倣つて、各大名 が版籍奉還を申し出た のが1869年（明治 2年）6月、これを受 けて、各藩では暫定的 に旧藩主が「知府事」 に任命された。↓薩長 土肥の下級武士を中心 とする新政府には、こ れらの藩に政府から知 藩事を派遣出来るだけ の人材が居なかつた ためである。 廃藩置県 この暫定的な統治制 度を抜本的に改革・近 代化するために、大久 保利通、西郷隆盛らを 中心に廃藩置県の原案 が立案され、これが岩 倉具視、三条実美らの 承認を得て実施に移さ れた。これが1871 年（明治4年）に始ま る「廃藩置県」である。 この時、先述の10府の 内、3都以外の「府」 は「県」に改称され、 各藩も「県」と改称さ れて、3府302県が 発足する。 その後、西郷隆盛が 1876年「征韓論」 を不服として下野、1 878年5月大久保利 通が暗殺されたため、 以後、廃藩置県は岩倉 具視の主導で進められ 、10数回に及ぶ府県 の離合集散・統廃合が 行われた。この過程で、 1879年（明治12年） には琉球藩が県に編入 され、更に、1886 年（明治19年）には北		海道庁が設置されるな どして、1889年（明 治22年）に3府1庁43 県体制が確立した。 その後1943年 （昭和18年）には樺太 庁が設置され、同時に 東京府が東京都と改称 された。1都2府2 府43県体制となつた。 それが、戦後、樺太を失 い、北海道庁が「北海 道に改称されたこと」 及び、第二次大戦後、 アメリカに接収されて いた沖縄が復帰したこ とで、現在の「1道1 都2府43県」となつて いる。 2. 淡路島の帰属の変 遷と名東（みよと） う）県 1869年（明治2 年）6月の版籍奉還後、 暫定的に、阿波国と淡 路国を併せた徳島県が 設置されたが、187 1年（明治4年）5月、 庚午事変に対する「徳 島・福山処分」の一環 として、旧稲田家の知 行地であった「津名郡 43か村・浦（洲本を含 む）」が兵庫県に編入 され、兵部省の直轄地 とされている。↓参考資 料 参照 因みに、この時、兵 庫県に編入されなかつ た「津名郡の残部」に は、尾崎村、郡家浦、 郡家浜村、多賀村、江 井浦、都志村、広石村、 鳥飼村などがある。 一方、同年8月に始 まる第1次廃藩置県で は、徳島県の名が名 東県と改められ、これ に阿波国と淡路国の一 部（三原郡と津名郡の 残部）が組み込まれて いる。つまり、淡路島 は一度は兵庫県に編入 された訳ではなく、ま ず旧稲田家の知行地が 先に兵庫県に編入さ れ、三原郡と津名郡の 残部は阿波国と併せて 名東県に組み込まれた のである。↓第1段階 津名郡（含、洲本）		の兵庫県編入 である。その後、1873年 （明治6年）に讃岐国 （香川県）も名東県に 編入されているが、こ の香川県は1875年 （明治8年）には名東 県から分離され、翌1 876年（明治9年） 8月、愛媛県に編入さ れている。同時に、阿 波国は高知県に編入さ れ、淡路国（三原郡と 津名郡の残部）は兵庫 県に編入されて名東県 は消滅する。↓第2段 階三原郡等の兵庫県 編入 この2段階の統合・ 分離・編入を経て淡路 島は全島が兵庫県に編 入となる一方、四国は 高知県と愛媛県の2県 体制となり、徳島県と 香川県は一時的に消滅 してしまう。 こうした徳島県や香 川県に対する明治新政 府の「冷たい仕打ち」 の背景には、庚午事変 の当事者である徳島県 に対する処分と、岩倉 具視の徳島・香川両県 （両家とも徳川将軍家 や御三家の直系が当主 で幕末には「佐幕派」 の立場を堅持してい た）に対する懲罰的対 応がし、この過激な 対応は、新政府のやり 方に不満を持つ全国の 不平士族を刺激する 一因となつた。つまり、 小六は、秀吉最古参の 参謀であると共に、実 質的に小六軍が秀吉軍 の中核となつた訳であ る。 前野長慶（ながよし） （1528年～159 5年、享年67）は尾張・ 松倉城主 坪内勝定の 娘婿であったが、義父・ 勝定が、織田家の内紛 （「跡目相続を巡る対 立」の際、清洲城の信 長に内通した科で切腹 させられたのを機に川 並兼に参加、そこで小 六と知り合い、肝膽相 照らす仲となつて「義		である。このように、明治4 年（同9年）にかけて、 廃藩置県における阿波 国と淡路島の取り扱ひ は目まぐるしく変容し ている。そこには、蜂 須賀家と稲田家の28 0万余にわたる盟友関 係の変容と明治新政府 の元勳・岩倉具視の意 思が深く関わってい る。以下で、その辺り を紹介したい。 蜂須賀小六の二人の 義兄弟 小六（1526年～ 1586年、享年61） は尾張城主・蜂須賀正 利（家禄200貫）の 嫡男であったが、父亡 きあと、美濃・尾張各 地を転々、木曾川の広 大な中洲を根拠に木曾 川の水運を一手に握つ ていた川並兼に投じ、 そこで頭角を現し、部 下30000余名を抱え、 一団の棟梁となつた。 織田信長とは尾張城 時代から面識があり、 時下藤吉郎（秀吉）が 足輕頭となつた時、信 長から、直属の配下の 少ない藤吉郎の補佐を 頼まれ、自らが率いる 配下30000余名の一 団を引き連れてその配 下となつた。つまり、 小六は、秀吉最古参の 参謀であると共に、実 質的に小六軍が秀吉軍 の中核となつた訳であ る。		石上 勝美 （高十三回生） 高十三回生 （女性四名） 有志一同 南 正光 （高十四回生） 淡路市長 門 康彦 （高十五回生） 北川 映子 （高十五回生） 千原 神戶市北区有野台四一〇一 TEL／〇七八九二一三三八 FAX／〇七八九二一三三八 松野 聡子 （高十五回生）	
---	--	---	--	---	--	--	--	--	--	---	--	---	--	---	--	---	--

兄弟の契り」を結ぶ。 稲田植元（たねもと）（1545年～1628年 享年83）は尾張・岩倉城主 織田信安の家老を父に持つが、この父も信長との内通の科で切腹させられ、植元は幼少にして父の朋友であった小六の元に預けられる。植元は小六の元で養育されるが、日夜、文武両道の修業を積み、元服して小六の配下となる。小六は植元の秀でた知勇と小六への強い忠誠心を高く評価し、この植元とも「義兄弟の契り」を結ぶ。 こうした経緯で長慶と植元は蜂須賀軍（＝秀吉軍）の中核的メンバーとなり、小六と共に、戦場を歴戦、数々の功績を上げ、秀吉の天下人への道を支えたのである。 墨俣一夜城 この3人が秀吉の出世街道進軍の切掛けとなる功績を上げたのが墨俣一夜城である。 今川義元を桶狭間で討ち、武田勝頼を長篠の戦いで破った信長は上洛を決意、その妨げとなる美濃攻めを行う。このため、木曾川の中洲で稲葉山城の正面に立地する墨俣に前進基地となる砦の造営を命じる。最初に命を受けたのが佐久間信盛。これは美濃側の反攻で失敗、次に命を受けたのが柴田勝家。しかしこれも失敗。 この時、手を上げたのが秀吉。川並衆として木曾川流域の地勢・水運・陸運に精通し幅広い人脈を有していた小六ら3人には、他の武将には思いつかぬ奇策があり、小六はこれに秀吉に耳打ち、秀吉に手を上げさせたのである。↓前野家文書による			
このプロジェクトが実行された時の各人の年令と役割は下記の通りである。 ・秀吉……25才。プロジェクトの総責任者 ・小六……36才。プロジェクト・リーダー ・長慶……34才。墨俣における基礎・石垣・城壁造営チーム・リーダー ・植元……17才。木曾川上流における築城用木材の伐採・加工・筏流しチーム・リーダー 秀吉らはこの編成で墨俣城を今という「ブレハブ方式」により僅か3日間で完成、織田軍に勝利をもたらしたのである。 この3人が秀吉の天下人への道を決定づける重要な役割を果たしたもう一つの出来事がある。かの有名な「備中高松城の水攻め」と「中国大返し」である。この時、3人が果たした役割は下記である。 ・小六……高松城水攻めの際の築堤を陣頭指揮。また、信長の討罪を得ると直ちに軍師黒田官兵衛と計り、光秀討伐のために配下の前野長慶、稲田植元とその手勢を先発隊として出陣させ秀吉本隊のために道中の兵站（水・食糧・武器等の手配）を整えさせた。一方、秀吉が高松城主・清水宗治の切腹を見届け、3日後に「大返し」に出発したあとは、黒田官兵衛と共に、備中の残り、毛利方と領地の境界決めを含む「和議」を纏めた。 長慶／植元……小六の指示に従い、秀吉本隊に先発し、あとから来る秀吉本隊のために道中の兵站を準備した。 大名への登用 秀吉に従い数々の戦			
功を上げた3人は、秀吉から加増を受け大名となる。まず、1580年（天正8年）、小六は竜野5万7000石、長慶は出石5万3000石、植元は河内2万石を与えられる。しかし、この時、植元は「竜野と河内に離れていては、拙者は義兄である小六殿を補佐することが出来ない」として、これを辞退し、手勢を率いて小六と共に竜野に赴く。秀吉はこの植元の心意気を厚く評価し、植元を蜂須賀家の客分とし大名格で遇するよう小六に命じる。 その後、小六は阿波17万5000石（のちに小田原攻めと朝鮮出兵の功で27万石に増加）を与えられるが、この時、小六はこの後は拙者は太閤殿下のお側でお仕えしたいので、阿波国は嫡男・家政に与えられたい」と願い出ると共に、「植元を今後とも阿波・蜂須賀家の客分として遇して貰うこととした」と申し出、受け入れられる。その後、江戸時代初期に至る経緯は前述の通りである。 義兄弟3人のその後 小六正勝と嫡男・家政 小六は秀吉の側近として大坂城に止まっていたが、1586年に病死。代わって、嫡男・家政が秀吉の秀頼の参手を務めるが、関ヶ原の合戦では家政は「病氣」と称して自ら参陣せず、その嫡男・至鎮が家政の指示で、家康の「上杉攻め」の「関ヶ原の合戦」に参陣、戦功を挙げ、家康から、阿波25万石を安堵されたことなどは前述の通りである。結局、小六は生涯、阿波に行くことなく大阪で病没			
地図中の各城の城主： ・岩屋（松尾山城）：源実春⇒大内（義興）⇒安宅（宗景）⇒雑賀（鈴木）孫市 ⇒安宅（信康）⇒菅（達長）⇒池田元助⇒菅（達長） ・洲本城：安宅（治興）⇒安宅（清康）⇒菅（達長）⇒仙石（秀久）⇒脇坂（安治）⇒池田（忠雄）：廃城 …復活：稲田（植元）⇒稲田（邦植） ・由良城：別名「由良成山城」 池田（忠雄）⇒ 稲田（植元） ・郡家城：田村（仲実）⇒経春⇒村春 ・志知城：菅（道忠）⇒野口⇒黒田（官兵衛）⇒加藤（嘉明）⇒代官・石川（紀伊守） ・沼島城：武嶋（五郎秀之）⇒梶原（景行⇒秀景）			
鎌倉時代～戦国時代の館と城： 淡路島には「淡路十人衆」や「安宅八家衆」と呼ばれる国人、豪族が居て、各地に館や城を築いていた。左図に記載のもの以外には、下記が知られている。 ・養置館（佐々木・長沼・細川氏：1519年落城） ・由良古城（安宅水軍の本拠地 …安宅清康：1581年落城） ・阿那賀城（武田久忠居城：1581年落城） ・鶴島城（福良長政居城：1544落城） ・湊城（安宅次郎居城：1581年落城。現・菊川邸） ・叶堂城（豊臣家代官 石川氏：1600年廃城） ・柳沢城（柳沢長盛居城：1581年落城） ・庄田城（船越氏1581年廃城 →船越氏は秀吉旗下で明石郡4000石に移る） ・岩屋（絵島が丘）城（池田忠雄：1615年廃城） ・仁井城（小田将監居城：1581年落城） ・猪熊城（菅氏 水軍拠点1581年落城） ・鍛冶屋城（賀集安親居城：1581年落城） ・白果城（安宅冬秀居城：1581年落城/廃城） ・炬口城（安宅秀興→秀益居城：1581年落城） ・志筑城/館（菅氏水軍拠点：1581年落城） ・生穂城（菅氏水軍拠点）：1581年落城） ・塩田城/館（塩田氏居城）：1615年廃城） ・広石城（片山頼忠居城：1575年落城） ・阿万城（郷重朝＝從朝居城：1580年落城） ・都志城（都志対馬守居城：1532年落城） ※ 廃城の跡地の多くは明治以降、官庁、学校、寺、銀行、銭湯、公園などになっている。			
京呉服 えびすがわ 夷川しめだ 〒604-0093 京都市中京区夷川通新町角 075-221-8139 岡 川 都 志 子 (高25回生)		高十七回生 サッカー部一同 川添 茂弘 潮崎 章二 正面 昇 中尾 清人	
山 本 登美子 (高13回生)		東 田 雅 俊 (高十六回生)	
		井 田 和 美 (高十五回生)	

している。因みに、家政のこの関ヶ原の合戦前後の巧みな立ち回りを称して、あの伊達正宗が家政を「阿波の古狸」と呼んでいたという逸話が残されている。家政の智謀家ぶりが窺える。

前野長慶は、秀吉が1591年(天正19年)、甥の秀次を後継者とするため、自らは太閤となり関白職を秀次に譲り近江八幡43万石に封じた時、その補佐役(家老)を命じられる。しかし、秀頼誕生により秀吉は淀殿の強い意向もあり、次第に秀次への権力委譲を白紙に戻したといえるようになる。そうした中で1595年(文禄4年)6月、秀次に謀反の疑いが掛けられ、長慶は「秀次に謀反の意思は無い」とを懸念した秀吉に訴えたが、これが逆効果となり、同年7月秀次が切腹せられたと、長慶は他の家老・宿老らと共に切腹を命じられ生涯を終えている。

植元(たねもと)は阿波では蜂須賀家の筆頭家老として家政を支えたと共に脇城・城代(石高1万石)を勤め、三好氏の残党狩りや抵抗勢力である土家の討伐など、藩内の治安維持と内政の安定・充実に勤め、特に、脇城下では樂市楽座の設置、地子税・賦役の廃止、殖産興業(特に、藍染めの発展、商人の自由通行を認め商業を振興するなどの施策を推進し藩の財政改善に大きく貢献している。察するに、植元は自分が幼少の頃から小六より受けた「親代わり」「義兄弟」としての数々の恩義に報いることを自らの「終生の務め」と

考え、これへの「恩返し」として、父・小六に代わって、若年の家政や至鎮(よししげ)を輔佐し、蜂須賀家の発展に尽力したのである。尚、脇城は1638年に廃城となっている。

また、植元は、大坂夏の陣後に淡路国・津市郡1万4000石を知行地として与えられ、洲本稲田家の祖となったことは前述の通りである。(1628年没、享年83、脇城下に葬られる)

庚午事変

蜂須賀家は7代で小六正勝の直系が絶えたため、8代目は高松・松平家から養子(水戸・徳川家の直系の血筋)を迎え「御連座」の仲間入りをするが、その直系も12代で絶えたため、13代目は11代将軍・徳川家斉の弟を養子に迎えている。こうした経緯から蜂須賀家は「松平姓」を賜り、御三家・御三卿並みの格式を得ている。但し、家名としては幕末・明治以降も「蜂須賀姓」を維持している。一方、稲田家は幕末・明治で植元の直系が続く幕末の動乱期を迎える。

このような関係から、「將軍の弟の家系」を誇りとする蜂須賀家は、何時の頃からか、当主も家臣も、最早、稲田家を「大名格の客分」で藩祖小六の「義兄弟の末裔」として尊重するの風を無くしており、むしろ、「外様」である稲田家とその家臣を「格下」「臣下」と「見下していた」ともいわれる。

孝明天皇や岩倉具視などから高く評価された。因みに、御三家の血筋である高松・松平家も「佐幕派」を通したため、廢藩置県では、香川県は徳島県同様、新政府から冷たい仕打ちを受けている。そんな中で、1869年(明治2年)版籍奉還とそれに続く身分・禄制改革が実施される。これは各知藩事に旧家臣団の身分と俸禄を決めさせ新政府に届けさせるもので、これを受けた15代徳島藩主(版籍奉還以降、阿波藩は徳島藩と呼ばれた)は蜂須賀家を急進派として、1865年死去(享年22)。当主として家督相続してから僅か5年余り、35才で没した先代植元同様、早逝であった。

後継の16代稲田邦植(くになり)は(家督相続当時11才。植誠の又従弟で14代植元の嫡男)は、若年ながら父や先代の遺志を継ぎ戊辰戦争に積極的に参加、島津伏見の戦いでは薩長軍に援軍を送り、また、御所の警備や有栖川宮の護衛任務にも当たるなど、官軍の勝利「明治維新の成功に大きな貢献をした」といわれる。

孝明天皇や岩倉具視などから高く評価された。因みに、御三家の血筋である高松・松平家も「佐幕派」を通したため、廢藩置県では、香川県は徳島県同様、新政府から冷たい仕打ちを受けている。そんな中で、1869年(明治2年)版籍奉還とそれに続く身分・禄制改革が実施される。これは各知藩事に旧家臣団の身分と俸禄を決めさせ新政府に届けさせるもので、これを受けた15代徳島藩主(版籍奉還以降、阿波藩は徳島藩と呼ばれた)は蜂須賀家を急進派として、1865年死去(享年22)。当主として家督相続してから僅か5年余り、35才で没した先代植元同様、早逝であった。

後継の16代稲田邦植(くになり)は(家督相続当時11才。植誠の又従弟で14代植元の嫡男)は、若年ながら父や先代の遺志を継ぎ戊辰戦争に積極的に参加、島津伏見の戦いでは薩長軍に援軍を送り、また、御所の警備や有栖川宮の護衛任務にも当たるなど、官軍の勝利「明治維新の成功に大きな貢献をした」といわれる。

所(益習館)、家臣らの屋敷などを襲撃した。これに対し、稲田家は政府への恭順の意を、多大な被害を受けた(これを「庚午事変」と言う)。この事変は不幸にも、知藩事・蜂須賀茂昭と稲田邦植らが岩倉具視に呼び出され香川に出張していた留守中に勃発したものである。徳島城下や脇町では急進派の動きを察知した重臣たちがこれを制したため、稲田家側の被害は、最小限に止められたが、洲本城下では蜂須賀家の急進派藩士8000人、銃士1000人、銃卒4個大隊の1000人を超える大規模な襲撃を行い、稲田家側は、自決2人、即死15人、重傷6人、軽傷14人、投獄3000人、家傷の焼失25棟という大きな被害を受けている。

因みに、この事変を扱ったほとんどの文献では、この急進派の大部隊が洲本城下に居たかのような記述をしているが、当時、まだそれほど大きな町ではなかった洲本城下で、これだけ大勢の蜂須賀家・家臣団が居住しており、彼らが稲田家襲撃のために、すぐ傍で準備をしていたことに稲田家・家臣団が気付かなかったというの是不自然。確かに、洲本城下には高取武士から足軽などの無格武士を含め3000人を超える蜂須賀家の家臣が居たとされるが、それだけでは、これほどの大軍にはならない。私は、稲田家襲撃部隊の相当数は蜂須賀家の知行地内にあった福良藩邸や江井藩邸に詰めてお

り、彼らが洲本城下の急進派家臣団と合流して稲田家を急襲したのではないかと考えている。徳島処分と稲田処分この騒動を知った岩倉具視は激怒し、徳島藩の主謀者小倉富三郎・新居水竹ら10人に斬首(後に蜂須賀茂昭の嘆願陳情により切腹に免れた)、27人に八丈島への終身流刑、81人には禁固、謹慎などの処罰を与えたほか、知藩事の茂昭や参事らも謹慎処分を受けた。これが「徳島処分」である。

一方、稲田家に対しては、蜂須賀家からの分離独立を認め、邦植を「華族」家臣を「士族」として定するが、領地として定するは、北海道・日高国静内郡と色丹島を与え、という名目で、兵庫県管轄の士族として北海道への移住・開拓を命じた。これが「稲田処分」である。

小六と稲田家初代・稲田植元が「親子同前の関係」で「義兄弟の契」を交わすほど固い絆で結ばれていたことによる。しかも、稲田家は「大名格」と認められ「客分」でありながら独自の知行地を与えられていた。

3. 幕末、両家の関係がギクシャクするに至った理由としては下記を指摘できる。

① 蜂須賀家の直系が絶え、高松・松平家が徳川將軍家から当主を迎えて「將軍家に繋がる家系」となり、稲田家を「客分」ではなく「家臣」あるいは「格下」と見下す風潮が強まったこと。

② 幕末、蜂須賀家が「佐幕派」の立場を崩さなかったのに対し、稲田家は早くから「尊土派」の旗印を鮮明にし、積極的に、尊土・倒幕運動に加担したこと。

③ 「身分・禄制」の実施に伴い、蜂須賀茂昭が稲田家とその家臣団を不当に低く格付けしたことに、稲田家・家臣団が反発し、岩倉具視にその是正と洲本藩の独立を訴えたこと。

④ これを知った徳島藩の若手急進派が稲田家を襲撃する事件(庚午事変、起し)、これが岩倉具視の激怒を買って「処分」を受けたこと。

3. このため、淡路島は①まず津市郡が兵庫県に編入され、②次いで、約5年後に三原郡等が兵庫県に編入されるという「二段階での兵庫県への編入」という他県には類例のない扱いを受けている。そこで私は考える。もし小六の直系が幕末まで蜂須賀家の当主であったとしたらどうだったか? 恐らく、蜂須賀家の当主は、家祖・小六と稲田植元の義兄弟としての深い交わりや、家政・至鎮時代の植元の藩政に対する多大な貢献をよく承知しており、両家は対等の難局を切り抜け、版籍奉還・身分・禄制改革に当たつても、稲田家を大名格で遇し、決して「庚午事変」のような揉め事を起こすことは無かつた筈。言い換えれば、蜂須賀家の重臣の中には、蜂須賀家と稲田家の260年以上に及ぶ長い因縁関係を良く承知するものが少なからず居た筈で、その者らが、そうした事情を知らぬ若年の藩主・茂昭に注進しておれば、茂昭も異なつた評価をしていたかも知れない。

しかし、残念ながら、蜂須賀家の重臣の中には、そうした行動をとる者が誰も居なかったと言えなくも無い。むしろ、誰かが茂昭に注進すれば、淡路島は間違いなく徳島県に編入されていたに違いない。

私個人は淡路島が徳島県ではなく兵庫県に編入されたという現実の歴史の方が良かったように思うが、歴史上、「直系が絶えたため養子を迎える」といった「よくある何」ということ、あるいは「後年、思いもよらぬ大きな災の原因となった」という事例が少なくないという事実は、その好例と言える。その意味で、「歴史」はあまり「予定調和」を好まないのかも知れない。

吉川泰久
(高十八回生)

花野正悦
(高十九回生)

FJK法律事務所

藤木啓彰
(高二十七回生)

大阪富田林工業団地協同組合

中野淑郎
(高十五回生)

有志一同

東京支部報

東京支部総会懇親会の報告



支部長 岩井 吉人
(東京支部高12回生)

阪神支部、東京支部のみなさんにおかれましては、益々ご健勝のことと存じます。日頃は、母校ならびに同窓会の発展のためにご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。今回も阪神支部の御厚意により阪神支部報の紙面に「東京支部報」を掲載していただきまして、誠にありがとうございます。さて、平成28年5月15日(日)アルカディア市ヶ谷で、東京支部総会・懇親会を開催しました。今回は、高島玲子・次期同窓会長(16回生)ならびに門康彦・淡路市長(15回生)が遠路淡路からご出席いただき、またご祝辞を賜りました。今回の総会のイベントとして、不動雅一さん(津名高13回生)による「淡路島の歴史と廃藩置県」何故淡路島は兵庫県になったか」について講演いただきました。



津名高等学校同窓会東京支部総会

めでたきことですが、東京大学大学院在学中(62回生)の鯛君、濱西君が出席され、自己紹介の時は拍手、喝采のひと時でした。懇親会は、いつもながら年齢差など関係なしの自由歓談で終始和やかな雰囲気であった。懇親会のフィナーレは、今回も「校歌」を全員で合唱し閉会しました。今総会の開催にあたり、淡路市商工会より淡路市特産の「吹き戻し」を参加者全員に無償で提供いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。最後に、2020年東京オリンピック開催の同年、津名高校創立百周年を迎えることとなり、この百周年記念事業(イベント)諸施策の成功のため、より一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。加えて、故郷の会・東京淡路会、同窓会・淡路市東京物産展、同窓会等々にご参加いただき、ふるさとへの応援と旧交を温められることを願っています。

「地方創生に思う」

公益財団法人日本離島センター事務局長 仲田 成徳

(東京支部高27回生)

日本全体が人口減少社会を迎えようとしており、人口が増える自治体はごくわずか。名のある都市でさえ人口が減っていくという大変な状況である。私は離島(残念ながら淡路は離島に入らない)に関わる仕事に従事しているため、過疎化・高齢化の進展は何十年も仕事上の枕詞になっていた。沼島をはじめとした日本の離島を例にとると、離島全体の人口は平成60年国勢調査までは、自然増であるが社会減が上回ったためトータルマイナス。平成27年国勢調査からは、自然減に社会減が加わって大きなマイナスという流れである。このように、地方の人口生産力が弱まり、加速度的に人口が減ることが危惧される状況といえる。今なぜ地方創生

か」ということになる。これまで大都市に人口(主として若年労働人口)を供給してきた地方にその生産能力がなくなってきたので、ここ何とかなければというのではない。淡路島の人口の推移を見ると、明らかにこの10数年で、高齢化と過疎化の同時進行のためか、20年前の離島地域と似た人口減少スパイラルに入り込んでいるようである。離島では、過疎化・高齢化の進展は何十年も枕詞になっていた。それでも無人島化した島は意外と少ない。平成27年国勢調査の速報値で人口の伸びが大きかったのが鹿児島県十島村である。人口は前回国勢と比較して101人増で、この村人(国調速報値)が居

淡路島の人口推移

国調年	淡路市に相当する地域(人口)	本市に相当する地域(人口)	南あわじ市に相当する地域(人口)	合計(人)
1970年	61,675	56,171	58,072	175,918
1975年	59,298	55,022	57,813	172,133
1980年	57,650	54,826	57,744	170,220
1985年	56,306	55,048	57,690	169,044
1990年	54,643	54,049	57,526	166,218
1995年	53,235	52,839	56,664	162,738
2000年	51,884	52,248	54,979	159,111
2005年	49,078	50,030	52,283	151,391
2010年	46,465	47,271	49,853	143,589

住し、村の端から端まで140キロにも及ぶ。本土との交通機関は週2便の村営フェリーのみにて、役場は鹿児島市内にある。ちなみに、自らの行政区域内に役場のない自治体は全国に3つあり、同じく鹿児島県三島村(役場は鹿児島市内)、沖縄県竹富町(役場は石垣市内)と全て離島自治体である。付け加えると、三島村と十島村は、戦前に大島郡十島村を構成していたが、敗戦によるアメリカ統治の綱引きのため、2つの村に引き裂かれた歴史を持つ。このような厳しい条件ではあるが、実は橋が架かっていたような便利な島ほど人が減り、増えているのは実は不便な島といえることが多い。東京都小笠原村も定期船は週1便である。それは至極生活に便利な都市生活者には中途半端に便利だが、行かないで、不便な地域生活の中に別の価値観を求めのかもしれない。平成の大合併で、自らが島の中から市町村役場がなくなった離島の減り方ははたして、この島の中に複数の自治体がある場合の合併は意味を持つと、小規模な自治体ほど、地域性の折り目の働き場所である。役場のなくなるダメージは大きいといえる。しかし反面、離島は都市に比べて合計特殊出生率が高いという特性がある。少し前に調べたところ、ベスト10のうち8つが離島自治体である。我が国の構造の欠陥は、出生率の高い地域に若い人が少なく、低い地域に若い人が集まっていたというミスマッチがもたらしたものと云える。地域社会のどういった一番困るのは人口減少ではなく、高齢者だけのコミュニティになることである。人口減少のトレンドはおそらく止めることは難しいが、常に子供を産み育てられる環境だけは守らなければならない。先ほどの十島村は、今はどうもやっている「定住促進」一ターニングの頃か取り組んできた。加えて、各島々に必ず小中学校がある。学校の維持・存続のための離島留学(都親が預かって地域の学校へ通う)もずと取組んできたというバックボーンがある。淡路島でも小中学生など児童の減少が著しく、小学校を中心としたコミュニティを維持する

震災と紙芝居



正司 顕好
(東京支部高27回生)

平成28年4月14日夜、16日未明に最大震度7を観測する大地震が熊本で発生した。21年前、甚大な被害をもたらした阪神・淡路大震災の悪夢がよみがえった。震災は、人生を確実に狂わせる。当時、淡路島の北淡町に住んでいた両親は、命だけは何とか守ることができたが、実家は全壊した。親戚の40歳の働き盛りの男性を一人亡くした。若い頃から学生相撲で鍛えられた強靱な体で自分倒れ掛かってくる柱を両肩で受け止めた。二人とも俺の足元へ寄り添った。加えて、各島々に必ず小中学校がある。学校の維持・存続のための離島留学(都親が預かって地域の学校へ通う)もずと取組んできたというバックボーンがある。淡路島でも小中学生など児童の減少が著しく、小学校を中心としたコミュニティを維持する。持するものと確信している。大震災が発生した。私は埼玉大学のボランティアグループと合同で福島県の被災地を紙芝居の実演をしながら巡回した。幼稚園、保育所、老人福祉施設、避難所としての仮設住宅等で拍子木をバチバチ鳴らす子どもも老人も若男女を問わず喜んで受け入れてくれた。特に避難所で何の楽しみもなく、先の希望も見いだせないで疲れ切っている高齢者たちの体が、懐かしい拍子木の音に反応してむくむくと起き上ってきた。後、一人のおばあさんで、一人のおばあさんで近づく。これでおもしろかった。おもしろかった。いい死に土産をもうた……ありがと……と手を取った。本当に、悲しく舞台から飛び出していく紙芝居の世界は、観客に共感と感動を広げている。演じ手の吐く息は思いと共に言葉になり、紙芝居の静止している絵は、言葉の響きと画面の抜き差しによって観客の心のかきで動き出す。人生が重なり、双方の共感の響き合いが感動を生んでいく。微力ながら紙芝居の不思議な力が、ここにある。機会があれば、熊本にも足を運べばと思う今日、この頃である。

東京淡路会副会長・事務局長
津名高等学校同窓会東京支部長

岩井 吉人
(高12回生)

千路園 埼玉県川越市寺尾六四一三
TEL 〇四九二四一八三三三

阿岸の七面鳥
日本で唯一の国産七面鳥(生肉)の通信販売

大村 正博
妻 ひろみ
(高20回生)

代表取締役 山口洋児
(高12回生)
〒247-0026
横浜市栄区大山町 32-5
TEL 045-892-5585
FAX 045-892-5523
0120-336-336

有限会社 山食
米穀・もち米・和洋酒・飲料・灯油
GOOD RICE & LIQUOR
やましょく

有限会社 山本ハウス
代表取締役 山本 和稔
(東京支部12回生)
〒302-0023 茨城県取手市白山4丁目3番11-201 TEL: 0297-74-5185
連絡先 〒344-0038 埼玉県春日部市大沼6-56-3
TEL: 048-734-1876 FAX: 048-793-7746

祝合併号発行
土井 満
(高8回生)

生きている幸せ

田代（畠中）みのり
（東京支部高21回生）

6年前の4月末、私は職場で倒れ救急車のお世話になった。自分の体にも起こった症状ではないかと思ひ、通院がなかった同僚に救急車の要請を頼んだ。薄れゆく意識の中で、家族に状況を連絡したことまでは覚えていた。

思った通りの病氣だった。開頭手術をした。運ばれたのが救急病院だったので、入院は3週間。その間、急に右手足の麻痺がおり、不安になったが、病院の先生の適切な処置のおかげで再び動くようになった。病院では、看護士さん、言語療養士さん、身体機能リハビリさん等、たくさんの方々のお世話になった。幸いなことに、後遺症なく退院できた。

自宅に戻ってからは大変だった。手足の筋肉が衰えていたの、階段の下り下りや洗濯物を干すこと等、ちょっとしたことをするのに時間がかった。それまで平気で歩いていた距離で息切れがしたり、人が多い商店街に買い物に行くのが怖かったりした。しばらくの間家事が十分でなかったが、家族が温かく支えてくれた。ありがたかった。

仕事は、約1年間休職した。仕事をしていても島民のために明石海峡を横断していた今は無き播淡聯絡汽船について記載したいと思ひ、この病氣は治ってもうつ病になる人が多いので気を付けるように言われていた。曰く、

私も頑張った仕事だったので、定年まで働けたことはとても嬉しかった。

私は今、生きていることの幸せを感じている。あの時救った命を、お世話になった方々、お世話になった方々に感謝しつつ、大事に使い切りたい。

4月初旬、津名高時代の友と旅をした。まさに生きている幸せを感じた旅だった。ふさふさの友と語り合い、満ちる喜びを感じてこそのあり

この桜の青空に出あえた日。高鳴る心生きてこそあり

今は無き播淡聯絡汽船、淡路連絡汽船について

小松 泰三
（東京支部29回生）

津名高校同窓会の皆様、阪神支部の皆様

津名高校を卒業して早くも38年が過ぎ、故郷淡路島から遠く離れた東京生活も33年とまじく「元陰矢の如し」のように過ぎました。

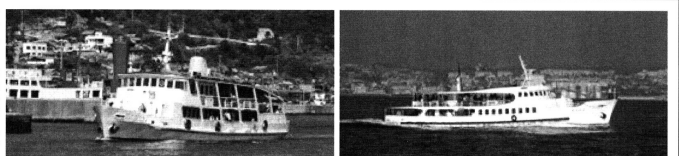
昭和53年に津名高校を卒業した我々29回生は今年、57歳を迎え定年まであと数年となり東京支部総会と再会以来、飲み会、ゴルフ会やクルージングなどを楽しんでます。

さて、我々29回生が淡路島で過ごした日々が島の主要交通機関であり、時代の荒波の中でも島民のために明石海峡を横断していた今は無き播淡聯絡汽船について記載したいと思ひます。播淡聯絡汽船は大正11年（1922年）に設立、淡路連絡



昭和53年卒業 東京在住29回生のメンバー

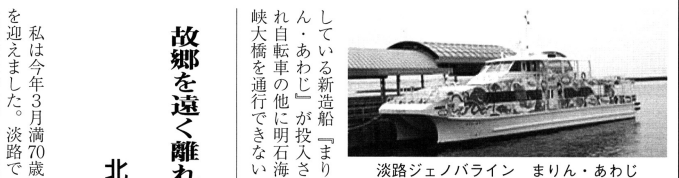
汽船は昭和31年（1956年）設立された前津名高校を卒業して早くも38年が過ぎ、故郷淡路島から遠く離れた東京生活も33年とまじく「元陰矢の如し」のように過ぎました。昭和53年に津名高校を卒業した我々29回生は今年、57歳を迎え定年まであと数年となり東京支部総会と再会以来、飲み会、ゴルフ会やクルージングなどを楽しんでます。さて、我々29回生が淡路島で過ごした日々が島の主要交通機関であり、時代の荒波の中でも島民のために明石海峡を横断していた今は無き播淡聯絡汽船について記載したいと思ひます。播淡聯絡汽船は大正11年（1922年）に設立、淡路連絡



在りし日の播淡聯絡汽船 からたち丸

淡路連絡汽船 いざなみ

私は今年3月満70歳を迎えました。淡路では同級生が「古希を祝う会」を開き旧交を温めあつたそうで、お誘いを受けながら出席出来なかった私は、淡路から遠く離れた所に住んだ事をうらめしく思いました。46年前にお見合いした相手が、神戸出身ですが関東に住んでいる今の主人でした。当時好きな私は、お江戸近所に住める事に憧れて故郷を去ることにしました。遠距離介護のストレスと更年期障害で、不整脈がひどく入院し、退院後引きこもりがちになってしまいました。姉妹と10歳以上離れた特別な末っ子で大変な甘えん坊が、甘える事が出来た人のいない所で片意地張って頑張りすぎたのかも知れません。その時点で、この私



淡路ジェノバライン まりん・あわじ

うつ病なんかになってたまるか！と自分自身を激励し頑張り出した。その時助けてくれたのが、散歩に連れ出した友達と、公民館で行われていた健康体操だった。開催される日が決まっていたので、今日はちょっと気分が乗らないと思う日でも仕方なく参加すると、帰りにほっとも明るくなっている自分が居て、その夜はよく眠れた。その間には元氣になっていました。

そこで早速この体操会を運営しているボランティア団体に入会しました。そして役員を経て6年前に会長に就任し、今年度無事次の方に引き継ぐことが出来ました。秦野公衛会と言ひ、（創立昭和49年任期中に40周年記念行事も執り行いました）秦野

故郷を遠く離れて頑張りました
北畠（橋本）尚子
（東京支部高15回生）

東京の皆様、淡路の皆様、また！

田村 洋子
（高44回生）

大切な人のもしものときに
（株）片山葬祭

片山 隆太（高五十六回生）
片山 悟（高二十九回生）

千歳岡 淡路市黒谷一四八二番地
TEL0799-841-1111
FAX0799-841-1131

自分の経験談を話して参加者を募り、ウォーキングを企画し先日新東名のトンネル工事現場も行った。最近では、各会場で「口角上げて2歳若返りの笑顔で挨拶」と70名程の皆さんが元氣に挨拶をしてくれています。日本は未曽有の高齢社会を迎えます。私達高齢者は、なるべく若い方に迷惑をかけないように、痴呆にならないように注意し「びんぴんころり」を、目指し今を楽しみ、したたかに、美しく生き抜いてやろうと思っています。

市健康推進員として市民の皆様健康づくりにお手伝いをすると、5ヶ所の公民館での健康づくり体操・3ヶ所の公園での近所体操・年3回のウォーキング・献血協力をお願いするお手伝い等、秦野市の公衆衛生事業に協力するボランティア団体です。会員は140名で、ほとんどが65歳以上の女性です。故郷は故郷で、今度は今住んでいる此処に愛しお役に立つために自分が出来た事を頑張るのが大事と、会長をお受けしました。各会場で、これからの高齢者には、「教育と教養」が必要で、「今日行くところが、今日行く用事がある」ということで、家に籠ってないで出てきて下さいと

市健康推進員として市民の皆様健康づくりにお手伝いをすると、5ヶ所の公民館での健康づくり体操・3ヶ所の公園での近所体操・年3回のウォーキング・献血協力をお願いするお手伝い等、秦野市の公衆衛生事業に協力するボランティア団体です。会員は140名で、ほとんどが65歳以上の女性です。故郷は故郷で、今度は今住んでいる此処に愛しお役に立つために自分が出来た事を頑張るのが大事と、会長をお受けしました。各会場で、これからの高齢者には、「教育と教養」が必要で、「今日行くところが、今日行く用事がある」ということで、家に籠ってないで出てきて下さいと

自分の経験談を話して参加者を募り、ウォーキングを企画し先日新東名のトンネル工事現場も行った。最近では、各会場で「口角上げて2歳若返りの笑顔で挨拶」と70名程の皆さんが元氣に挨拶をしてくれています。日本は未曽有の高齢社会を迎えます。私達高齢者は、なるべく若い方に迷惑をかけないように、痴呆にならないように注意し「びんぴんころり」を、目指し今を楽しみ、したたかに、美しく生き抜いてやろうと思っています。

俳句

安保(吉岡) 美恵子(高12回生)

初風や連絡船の行き違ふ

漁始国生みの島動き出す

故郷の福神巡り島巡

潮の香を孕みし厨なづな打つ

磯遊び水平線の染まるまで

青田波地震の傷跡埋め尽くす

懐かしき島の言葉や夏座敷

盆僧は母校の恩師膝正す

街と島つなぐ大橋天高し

はらからと遊びし浜辺千鳥啼く

近詠

山本 登美子(高13回生)

どっかりと枯草に座す山の昼空の広さよ露味噌むすび

ともに咲きともに一面わたばうし何やら楽したんばば達は

心はねしやばん玉なに見落とすとお空に消えて跡形なし

級友も幾人逝きぬ校の門照り満つ坂の車より見ゆ

語ることなきまま逝きしその人の淵なる心思ふ日のあり

川柳風・津名高及び淡路島の歌

岡内 ととむ(高16回生)

1 こだけは覚えてる。

2 その名津名、ここしか歌えぬ人も居て

3 意味を調べようと思いつく何となく歌って何十年。校歌三番歌詞

4 竹中さん「なぞえ」は少し難しい

5 意味の取り方いろいろ みんな頑張ろう。

6 伸びしろはたつぷりあります津名高卒

7 古事記に出て来る淡路島。淡路島が神に似ている。エッおかしくない？

8 ほのさ穂之狭わけ別しま嶋、どこの島かと淡路島

9 服部風習 芭蕉の高弟は郷土の先輩。梅一輪一輪ほどのあたたかさ

10 梅一輪わがふるさととの俳諧師

11 格が違う。頭が高い。

12 伊井諾は神宮だぞと胸をはる

13 ソロバン道消えて良かった淡路から

14 語尾にトラ。下ラ退治して美しい言葉使いをの運動もあつたけ。

15 淡路には豹ではなくて虎がいた

16 近い近い淡路島 近い近い我が母校

17 フルサトハトオクはないよ橋続き

18 淡路島で土産を持帰ってビックリボン。

19 特産の玉ねぎスーヴ、チャイナ産

20 冬の季節風の厳しさ

21 西浦は裏日本かと空あおく

22 歴史の大発見「こっさ」地名も魅力的。五斗長垣内遺跡。HPあり。

五斗長遺跡、島を出た人訪ねてね

求む投稿

阪神支部では、支部会員の皆様の同窓会等(ミニを含む)の開催・報告(集合写真)・案内等及び俳句・川柳・短歌・旅行記・詩等、ジャンルを問わず募集しております。

編集部・支部長・副支部長まで原稿をお送りください。

(役員名簿は2面に掲載)

津名高校同窓会阪神支部編集部

こだわりの効用

沖 正典(高9回生)

京都四条河原町の百貨店の地下売り場に、京漬物の店が6店ほど、軒を連ねて並んでいる。阪神・淡路大震災の前に、友人から、土産にもなった。在所漬物を今も、京都に行けば必ず買いたい。重宝に頂いている。さて、この漬物に思いのほか、こだわりを持つている。一度決めたなら二度とは変えぬ。人生一路という歌の一節である。味は、他店の物のほうが優れ、満足度が高いかも知れないが、そんな事は、私にとつて無関係である。ある時、店頭で、売り切れご免で、品切れの時があった。本来なら、他店の数ある類似品を購入し、数字合わせをして一件落着とすところだが、そうはいかない。このまま、手ぶらで帰るのか、はたまた、製造元まで行って、購入して帰るのか、二択である。大原三千院の製造工房まで、車を飛ばして、入手。

工場見学をして、心も軽く見も軽くなり、帰途に就いた日の事が、鮮やかに、蘇ってくる。今日は、そび打ちの実演を通じて、職人芸の凄さを教えられた。そば生地を延ばして行く過程では、のし板の上で、のし棒を上下左右に、また斜めに、誠に見事に転がして、微妙に直径の違う別の、のし棒を巧みに操っていく。ある程度延ばすと、手で厚みを確認していく。のし棒だけでなく、十数本あって、湿度・湿度とか環境によって、使い分けている様に思える。仕上がった生地を、幾重にも重ねて、いよいよ、包丁の出番である。刻んでひと区切り。一人分の仕上がり。のようだ。一回、一回、秤にかけての計量作業だが、実に目を見張る。一本のプラスかマインスカの世界である。見栄えの良くない一本二本を入れ替えるぐらい

季節の料理(淡路の玉ねぎを使った)

石田きさ代(高13回生)

淡路で採れた新玉ねぎが美味しい季節ですが、生ではサラダや薄くスライスしてたっぷりの鰹節とポン酢で食するのも一考ですが、簡単にできる新玉ねぎ料理3品を紹介します。材料はいずれも2人前です

1 焼玉ねぎ

玉ねぎ1個を先端と根の部分とを切り落とし、横半分に分ける。

フライパンに太白胡麻油小さじ1入れ、蓋をして、弱火で4分裏返して3分焼く、火を止めて黒酢小さじ1、醤油小さじ2を回しかける。

2 玉ねぎの和風スープ

玉ねぎ150gを薄切りして油小さじ1ですき通るまで5分ほど炒め、そこに鶏肉ミンチ30gも加えてさらに炒める。だし汁400ccを加えて蓋をして弱火で20分煮る。

粗熱が取れたらミキサーにかけ、鍋に戻して塩少しと薄口醤油で味付けをする。ねりカラシを乗せてどうぞ。

3 新玉ねぎのまる煮

小さめの玉ねぎ2個の根元に包丁で十字の切込みを入れる。鍋にその玉ねぎ・ベーコンの細切り1枚、ブイヨンに1/2個、水400ccを入れ、蓋をして弱火で30~40分煮る。塩・胡椒で味付けをして出来上がり。



で、職人の作業には、終始、独特のリズムがあり、胸に迫ってくる崇高な感動。職人のこだわりとか、よく耳にする言葉だが、感動という果実を与える事の出来るこだわりこそ、真のこだわりと言わなければならぬ。

とすると、漬物にこだわりを持ち続ける来たという。これまでの自分の姿勢は、一体何だったのか？ただ単に、利己主義、自己満足の枠を越せない、融通の利かない幼稚な事だとしか言い様がない。

心地よい風が頬を撫でる。野鳥が飛び交い、山羊が田圃に付き、青空のもと、遠く播磨灘が見える。まさに、田園風景の象徴。こは、「そばカフエ生田村」そば打ち職人の技に、目を覚まされた一瞬である。折しも今日は、春の彼岸の中日、目覚めは、ご先祖さんからの教示か戒めか……。非を改めるに、遅きはしない。

